

EurekaXIV

六年制通信 No.14 令和8年7月10日(金)号

内なる声

君たちを見ていて、時々植物の種子のことを考えることがあります。君たちが植物に似ているという意味ではありません。両者の違いについて考えることがあるという意味です。例えばリンゴの種子は、発芽し大きなリンゴの木となり豊かな実を結ぶには環境に恵まれる以外にありません。動物に食べられどこか遠いところに運ばれたとして、石の上にでも捨てられたらそれでおしまいです。絶対に発芽しません。本来の種子の持つ能力が発揮されぬまま終わってしまいます。どんぐりでも、池にはまってしまっただけで腐ってしまうだけで大きなブナやシイの木にはなれません。ドジョウと遊んでいる場合ではないのです。植物は自分で環境を変えることはできません。

私たち人間も生まれる時代や場所を選べないという点で、環境が成長に与える影響は非常に大きいことは事実でしょう。しかし、私たちは自分の意志で自分の成長するベストな状態を主体的に作ることが出来ます。考えてみると、ホモ・サピエンスとしての人間は、誰でも肉体面にそれほど相違はありません。どんな猫でも犬とは違う特徴を持っていて、チラッと見るだけであれは猫だとわかるのと同じように、人間は他の動物とは違う肉体的特徴を持っているわけです。相対的に足の速いのや槍を遠くへ投げられるのがいるだけの話です。私も 100m を 10 秒では走れませんが、30 秒あればたぶん走れます。肉体面の差はその程度のことです。しかし、精神面は人それぞれ全く違うのではないのでしょうか。その強さも豊かさも千差万別と言っていいでしょう。肉体的には限界があって、幼いときからどんどん背が伸びて 5 メートルの身長になったという人はいないと思いますが、精神の成長はおそらく止まることがないと思います。生きている限り、本人が望んで勉強する限り、どこまでも成長することでしょう。

ただ、我々の精神的な可能性や潜在能力に本人があまり気づいていない場合があるのです。ですから、本来その人の持つ潜在能力を開花させる分野を知らないで、自分から石の上に登ってしまうようなことをしてはいけません。それにはどうするか。これも昔から、自分の内なる声を聞き、勇気をもってそれに従えばいいのだと言われていました。度々登場してもらっていますが将棋の藤井聡太六冠は内なる心の声に正直に従ったに違いないですね。普通、内なる声は小さくてよく耳を澄まさないで聞こえないとされているのですが、藤井六冠の声はきっと外に漏れるくらい大きかったと思います。非常にまれなことだと思います。

内なる声は自分だけのものです。同調圧力とは真逆のことです。内なる声は勉強をしていくうちに大きくなってきます。精神面に何の刺激もないうちから声が聞こえる

ことはありません。ですから今は静かに勉強を続けることが大事なのですね。

最近読んだ本にこんなシーンがありました。

「成瀬さんは将来何になるんですか？」

漫才も司会もできて、パトロールが趣味で、京大を目指すほど勉強が得意な人は将来何になるんだろう。

「先のことはわからないからなんとも言えないが……。何になるかより、何をやるかのほうが大事だと思っている」

何になるかより、何をやるか。わかるようなわからないような言葉だけど、成瀬さんが言うとかっこよく感じる。

「たとえばわたしはパトロールを好きでやっているが、警察官になりたいとは思っていない。会社員になったとしても、パトロールはできるだろう。だからわたしが何になるかは未定だが、地域に貢献したいとか、人に役に立ちたいと思っている」

わたしは鳥肌が立つのを感じた。

答えているのは高校三年生です。普通は何になって世の中を生きていこうかと考えるのですが、それよりも優先するのは「地域に貢献したい、人の役に立ちたい」と考えることだと、この主人公は言うのです。確かに、こういう内なる声が聞こえる若者が増えてほしいと思いますね。質問している小学生は鳥肌が立ったと言っていますから、やがてこの子にもこの主人公と同じ声が聞こえることでしょう。

今週のおすすめ

・東野圭吾 『小さな故意の物語』 （講談社文庫）

これは講談社のヒットですね。ワンコイン＋消費税。三つの短編が収められています。いずれも私の大好きな作品。別々の本から収録されているのですが、私は元の三冊をすでに読んでいます。忘れている短編の多い中で、これらは三つとも強く印象に残ったとみえて、結構細部まで覚えていました。読書を楽しいと思ってもらうにはうってつけの短編集だと思いますから、君たち、お小遣いで買ってみたいいかがですか。講談社も恐らくそれを狙ってこういう企画をしたのだと思いますよ。いい思いつきです。

私はタイトルにもなっている「小さな故意の物語」が特に好きですね。これはドラマになっているのですが、確か三浦春馬と波瑠のお二人が主演でしたか。しかし、プロットとしては圧倒的に本の方がいいです。おすすめです。校舎の屋上から転落した高校生。その恋人と親友が転落の謎を探るのですが、推理小説の醍醐味と言いますか、一度決着がついたように見せかけて、最後に本当の大団円を用意すると。こういうのが読んでいて一番楽しく、ページをめくる手が止まりませんね。

「冷たい灼熱」は毎年夏になると耳にする何とも言えない悲しいニュースを題材にしています。途中で君たちも気がつくかも知れません。東野さんらしい展開です。

「しのぶセンセの推理」は前に紹介した『浪花少年探偵団』から選ばれた掌編です。しのぶ先生が魅力的でいいですね。会いたくなります。怖いけど。

BGMは Venessa Carlton の *A Thousand Miles* でした…。